多文化共生教育に係る実践レポート

道徳の授業「国際理解・国際親善」における外国人児童の活躍場面の設定

中之条町立中之条小学校　教諭（JLT）　伊藤　義明

１　実践のねらい

小３道徳教材「マサラップ」（光村図書）に登場するフィリピンの言葉、料理（アドボ・シニガン）の紹介をフィリピン出身の対象児が行うことで、学級の児童が、他国の人や文化を身近に感じ、親しめるきっかけとする。＊「マサラップ」とは、フィリピンのタガログ語で「おいしい」の意味

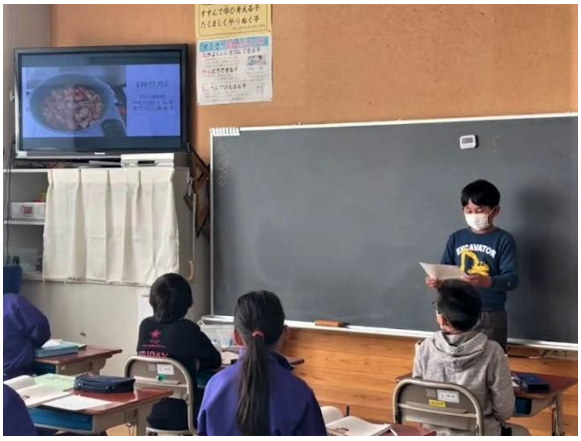
２　実践の概要

1　道徳の授業で「マサラップ」を学習することを対象児に事前に伝え、学級の児童に「アドボ」と「シニガン」の紹介をするよう促すとともに、取り出し指導において発表の準備と練習の支援を行う。

2　対象児童の保護者への協力をあおぎ、家庭での料理の様子や食事風景の写真提供を依頼する。

3　本時の授業はＴＴで行い、対象児の発表のタイミングや、やり取りについてＴ１（担任）と事前の打ち合わせを行っておく。Ｔ２（JLT）はＰＣ操作等、対象児の支援を行う。

３　活動の様子



発表の様子

プレゼン資料（一部）

☆児童の感想（「他の国の人と、なかよくなるために大切なことは？」《抜粋》）

・同じ「人」だと思うこと。　さべつしないこと。　（他の国の）文化を知ること。

・他の国の言葉を調べたりして、話してみる。

・何かこまった時には、助けてもらう。

４　成果と課題

・保護者の協力のもと、本人が食事をしている様子などの写真を使ったプレゼンテーションを行ったことにより、対象児が意欲と自信を持って自国の食文化について発表することができた。

・教材文に出てきた言葉（マサラップ、アドボ、シニガン）について、対象児が体験を通して発表したことにより、「料理の写真」や「調理方法」、「どんな味か？」等、学級の児童がイメージと理解を深めることができた。

・多文化共生教育に対し単発的な取組で終わらせず、意図的かつ計画的な取組となるよう、６年間の年間指導計画を見直し、位置付けるなどの工夫が必要である。